

吹田の自然観察と保護・保全活動

吹田自然観察会 高 畠 耕一郎

Study and conservation for the nature of Suita. Koichiro Takabatake (*Suita Nature Society*)

「かんさい自然フェスタ2008」のイベントの一つに「自然保護に役立つ自然保護教育とは」というテーマでシンポジウムが行われたが、そのシンポジウムでの話題提供として吹田自然観察会で取り組んできた、吹田市における自然観察運動と自然保護・保全活動についての紹介を行った。

吹田の緑の現状

吹田市は、1960年頃から始まった千里ニュータウン開発、1970年の万博開催、その後のマンション建設が続く中で、原風景として存在した千里丘陵の里山がどんどん姿を消し、全地域が市街化区域になった。人口は1960年12万人、1970年26万人、1987年35万人となり、その後は横ばい傾向である。14～15年で一気に開発が進み土地利用の改変が進んだ街といえる。

吹田市の緑地でもう一つの特徴は、北部は緑地が多く、南部が少ないという「北高南低」型である。少し縦長の吹田市を名神高速が右斜め上に横切っているが、名神以北と以南では、緑被率が全く違う。吹田市全域の緑被率は22.4%であるが、北部にある千里ニュータウン地域では、40.3%、やや北部の山田・千里丘地域28.2%、真ん中の千里山・佐井寺地域で17.4%、やや南部の豊津・南吹田地域では8.0%、大阪市内と隣接するもっとも南になるJR以南地域では4.7%（快適環境推進

構想：吹田市、1994）となっている。

現在、市内のほぼ真ん中に千里ニュータウンの周辺緑地が帯状に残されているが、約60年前の1948年に撮影された飛行機からの写真と比較すると、その改変の急激さに驚かされる。

吹田自然観察会の活動紹介

吹田自然観察会の組織と理念

吹田自然観察会は、大阪自然環境保全協会の吹田在住の会員が中心になって、地域観察会として1989年に結成した。吹田市内の自然環境の保全と保護、自然に親しむ活動を行うことを目的とした。2008年末で会員130名。ほぼ毎月市内での公開観察会を開催し、平均すると30名ほどの参加者が集まる。会報誌はA4判16頁で隔月に発行。秋には紫金山公園で「どんぐり祭」という親子で自然体験をする行事を1990年から行っている。毎年200名ほどの参加者がある地域行事として定着している。また、3年前より「紫金山子ども自然教室」を年4～5回の連続講座として開催し、25名の子どもが自然体験・自然学習できる場となっている。

吹田市では最大規模の雑木林（約7ha）が残っている紫金山での里山管理を、市民ボランティアを組織することにより行っている。また、吹田市全域でのいろいろな生き物調査と保護活動を、他の環境団体と協力しながら行っている。

毎月の自然観察会

吹田市内で自然が比較的残っている場所を中心に、ほぼ毎月実施してきた。会員のアンケートに基づき、新年の総会で1年間の行事計画を決め、植物、野鳥、昆虫、キノコ、などをテーマにし、毎回、約30人の参加者がある。また、夏には他府県に行く1泊の宿泊観察会をバスツアーとして行っている。

テーマによって、親子連れが多く参加したり、大人中心の観察会になったりしている。講師解説型は少なくして、体験・参加型・全員で調査をする観察会を実施するように心がけている。2008年11月には、200回目の観察会をした。

紫金山子ども自然教室

紫金山をフィールドとして、子ども対象に年4～5回の連続講座をしている。小学生の親子連れが25人ほど参加している。紫金山の自然を体感し、自然に親しむことをテーマに、自然観察はもちろんのこと、木こり体験や自然物の工作、昔遊びなど体験重視の活動を行っている。

紫金山の保全活動

当会が1989年に結成をしたこの年、吹田市は市報で紫金山の総合公園計画を発表した。博物館などの工事計画も盛り込まれていて、大規模な改変が行われようとしていた時期であった。結成直後の1990年4月に会として市に対して「紫金山総合公園化に対する要望書」を提出した。主な内容は①紫金山の自然生態を守ること②釈迦が池のコンクリート護岸をやめ、水辺に水鳥を呼び寄せることができる池づくりをすること、などであった。さらに、同じ年の12月には、建設計画の博物館周囲に植栽される樹木について以下の要望書を市長に提出した。①博物館の周りに植栽が予定されている樹木は、一旦、白紙に戻すこと。②植栽する

樹木は、紫金山公園に調和のある景観を維持するために、現在公園内の雑木林に生えている樹木にすること。

交渉の結果、博物館予定地には、元々自生していたカスミザクラの一部を保全し、博物館建設後に植え戻すことも決まった。

1996年10月には、紫金山公園の総合計画と保存についての要望書を提出した。これは、市によって進められている紫金山公園の総合計画全体について、「紫金山公園に生息する生き物を最大限維持し、生態系を保存できるように公園計画をすすめてほしい」「ビオトープのある都市内の公園」と生き物に焦点をあてた吹田自然観察会の意見を表明するものであった。具体的には、7点をあげて要望した。主なものは、①紫金山公園内を通る予定の都市計画道路は、公園内の地下を通る計画に変更すること ②枯れかけているコバノミツバツツジを復活するために、一部植生管理をしていくこと ③釈迦が池に水鳥を帰らせる取り組みをすること ④計画されている大型施設である「水道橋」「ボードウオーク」の建設は廃止 ⑤博物館前の池は、トンボが生息できる湿地ゾーンとして活用すること などであった。

これらに対する市の回答は、ほぼ全面的に私たちの主張を認めるものであった。

1999年5月には、紫金山公園の保全についての要望書①紫金山の里山管理事業の継続実施 ②緑のボランティア（紫金山みどりの会）を自主的な組織として育成・援助すること ③自然遷移エリア内の散策路整備を急ぐこと ④田圃の利用と保全をおこなうこと などを要請した。

これらの要望書と市への様々な働きかけを吹田自然観察会は他の環境団体の援助も受けながら行ってきた。吹田市長が替わったこともあり「紫金山風土記の丘10年計画」が実施の方向で動き出し、行政・環境団体・地元自治会・市民による紫金山

運営協議会として実際の計画実施を担った。

吹田市の「風土記の丘基本計画まとまる」「市民参画の成果 開発型から自然を守る計画に」と見出しをつけたカラー版4頁の市報特集版を2001年8月15日発行した。

「10年前に出した紫金山の整備計画は、開発型で環境保全の観点からも、いまの時代に合わなくなりました。市は市民参画で計画をつくり直すことを決定。新しい計画の策定作業がはじまりました。将来にわたって紫金山の自然を守り、次世代に伝えていこうとする計画です。」「以前の人工の滝とせせらぎは、完全に姿を消し、花見広場も見直され、現在ある水田の保存が決まりました。」と市民に発表した。

その後、この風土記の丘計画に基づき、紫金山公園は自然環境を大切にする公園として整備が進められている。

吹田市内の生き物調査を市民参加で各種実施

都市化が完全に進んでいる吹田市内にも、よく見ると多様な生き物が生息している。それらの生き物調査を、テーマを絞り環境に関心のある市民や小中学生の参加で実施してきた。

(1) ヒメボタル調査

西山田地区の千里第4緑地に生息しているヒメボタルを、1998年から毎年5～6月に毎夜、発光数をカウントする方法で実施。5月下旬の最盛期には、700～800匹のヒメボタル発光を確認している。また、吹田市内で生息していそうな10カ所をこの時期に調査し、発光数は少数だが、吹田市内5～6カ所ヒメボタルが生息していることを確認している。

(2) セミの抜け殻調査

セミの抜け殻調査とは、緑地が多く、地面が湿っている環境に多く棲むアブラゼミ・ニイニゼミ・ツクツクボウシと、緑地が少なく地面が固く乾燥

していて、気温が高くなる環境に棲むクマゼミと
いうように、セミの好む生息場所の環境を調べる調査である。

1996年には、吹田自然観察会などの5つの環境市民団体と幼稚園7園・小学校25校・中学校12校が協力して調査を行い報告書にまとめた。学校関係者だけでも6200名が参加した。5880匹のセミの抜け殻を集め、アブラゼミ49.8%、クマゼミ44.1%、ニイニゼミ4.2%、不明・その他1.9%の結果になった。これらをカラーの「セミの抜け殻マップ」として作成し、学校教育や市民の環境教育に役立てた。その後、規模が少し小さくなったが2004年にも小中学校17校2057名が参加し、4764匹の抜け殻を集め、地域の環境を考える学習を行った。

(3) ツバメの巣調査

1994年と1997年の6～8月には、吹田自然観察会などの環境団体と多数の小中学校の児童生徒とで、吹田市内に存在するツバメの巣を調べた。1994年にはツバメの巣157カ所、1997年にはツバメの巣251カ所、コシアカツバメの巣7カ所を調べることができた。ツバメの巣は、カラスやヘビなどの外敵から卵や雛を守る人通りの多い場所にあり、周辺には巣作りに必要な泥や、餌になる虫が多くいる田圃や林が近くにあることがわかった。

巣のマップと報告書を作成した。

(4) タンポポ調査

(社)大阪自然環境保全協会が5年ごとに大阪府下でタンポポ調査をしているので、吹田市でも同様の調査方法で、学校・環境団体・市民で1990年から5年ごとに取り組み、報告書とパネルにして報告している。2000年調査では、4904個体を調査した結果外来種の割合が60.6%であったが、2005年調査では340個体の調査しかできなかったが、外来種の割合が86.5%と急増していた。

(5) 古木大木調査

吹田市内にある幹周り2m以上の大木を1997年と2007年に吹田自然観察会とすいた市民環境会議で調べ、報告書とマップにして市民に報告している。1997年には420本しか調べることができなかったが、2007年には、約2倍の928本を調査できた。大木の内訳は、2007年調査では多い順にクスノキ40.1%、ポプラ7.4%、エノキ6.8%メタセコイヤ6.5%、サクラ5.8%、コナラ5.0%、アベマキ4.4%、ユーカリ2.5%などとなっている。10年の間に切られた大木も少なくない。それぞれの事情を聞き取り調査をしたが、枯れたものはほとんどなく、大半が開発や迷惑論で切られていた。都会で大木が人間と共生しにくい実情も明らかになった。

(6) ベニイトトンボ調査

大阪では準絶滅危惧種になるベニイトトンボが吹田市の池に生息していることがわかり、吹田市の大きなため池18池を2006年に調査した。その際、池の護岸状況、水生植物、周囲の環境、他のトンボ類、その他の生物なども調査し、池の環境とベニイトトンボの関係も調べた。その結果、5カ所の池でベニイトトンボが確認された。それらの池はヒメガマ、ヨシ、ヒシ、フサジュンサイなどの水生植物が多く、自然護岸が多く残され、池の周囲にも林が残っている場所であった。

生き物の保護・保全活動

(1) キツネ

吹田市にもキツネが生息し、繁殖もしていることが1994年に明らかになった。場所は大手保険会社の社宅地内であった。毎年のように子育てが確認されるにつれ、2002年には紫金山公園でも子育てが目撃され、JR吹田駅近くの片山公園でも生息が確認されるようになった。

しかし、毎年子育てが確認されていた大手保険会社社宅地が閉鎖になり、マンション計画が明ら

かになった。吹田自然観察会とすいた市民環境会議の環境団体がキツネの保護と生息調査を吹田市と大手保険会社に要求し、3年に渡り話し合いが行われた。キツネの生息調査は行われたが、一部の繁殖場所とその周辺の緑地を残す形での開発になった。結局は12階建てと15階建ての総戸数400戸のマンションが建設された。その結果、その後はこの地だけでなく、紫金山公園、片山公園でもキツネの姿は見ることができなくなった。

(2) 古木大木

幹周り2m以上の大木を3回調査した結果、多くの大木が吹田市に残っていることがわかったので、その保護を吹田市に要請し、1998年に「吹田市みどりの保護及び育成に関する条例」が制定され、保護樹木・保護樹林の指定と助成が行われるようになった。保護樹木には立て札が毎年少しずつ設置されてきている。

(3) ヒメボタル

吹田自然観察会などの環境団体が1998年より毎年ヒメボタルの発光数調査を続け、ヒメボタルの幼虫生息調査、餌になる陸貝の調査などを独自に行っている。

その生息地である千里第4緑地の保全と管理は、NPO法人吹田みどりの会を別に結成し、吹田市と連絡を取りながら実施している。

(4) ピアノ池の保全と管理

ニュータウン造成時に遊水池として造成された池でヒメガマの大繁殖や外来魚のブラックバス・ブルーギルが大量発生した。そのため地域住民と公民館、吹田自然観察会などの環境団体と行政が「ピアノ池の環境をよくする会」を2005年に結成し、繁殖しすぎたヒメガマ刈りと池の環境を守る活動を毎年実施している。このきっかけは、吹田自然観察会と(社)大阪自然環境保全協会が独自に行ったヒメガマ刈り大作戦が成功したことで、地域住民や他の環境団体を巻き込んでの運動になっ

た。

地域の自然を守る活動を大切に

吹田自然観察会は結成時から、「地域の自然保護・保全のための活動」をととても大切にしてきた。自然観察や環境教育活動は、地域の自然保護・保全と切り離しては考えられないとの基本方針を堅持している。しかし、自然を観察したり、自然に関係するイベントに協力している多くの団体は、自然に親しみ大切にするという行為はしているが、自然破壊や自然改変する行為に対して、自分の意見を持ち、行政や企業に対して要請したり共同行動を提起する活動はほとんど見られない。そのため、自然観察する場所が無くなると次の自然豊かな場所を探して行事を行うという行為が繰り返されている。

吹田市のように都市化した街では、原風景と言われている里山の自然はほとんど残っていない。それでも、注意して観察してみると、小さいけれ

どもあちらこちらに自然の生き物たちの営みが見えてくるし、そのような場所がいくつもあることにも気がつき始める。そして、それらの小さな緑地や池などの水辺が、次々と住宅地になったり、小綺麗なだけの都市公園としての自然改変が行われている。このような人間の行為に対して、何とかならないかと考え行動をしているのが吹田自然観察会の活動と言える。

地域の生き物に関心を持ち、自然観察や生き物調査を続けていく中で、生き物の立場にたった自然環境を守り育てる行為を意識的に行い、提言や提案を行政や企業に行ってきた。

私たちは自分の住む小さな地域の自然を守る活動を、これからも続けていきたいと考えている。

引用文献

吹田市生活環境部（編）．1994．快適環境推進構想 いきいき吹田/資料集．pp. 274．吹田市生活環境部．大阪．

